

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	松 岡 礼 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
文学の学習指導における「ワイドー・リーディング(Wider Reading)」の研究			
論文審査担当者			
主 査 教 授	山 元 隆 春		
審査委員 教授	難 波 博 孝		
審査委員 教授	間 瀬 茂 夫		
審査委員 准教授	三 時 眞 貴 子		
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、学習指導の問い直しが行われている高等学校国語科における「読むこと」の学習指導において、学習者の読むことへの関与を引き出しながら、読解力を伸ばしていく指導方法論を求め、イギリスの文学教育における多読指導法 Wider Reading の重要性を認識し、この指導法に学んだ知見をいかして、高等学校国語科における文学の学習指導の革新をはかったものである。</p> <p>本論文は、序章（研究の目的と方法）、第1章（イギリス前期中等教育課程におけるワイドー・リーディングの検討）、第2章（読むことへの関与を促す教材選択と学習指導構想の検討）、第3章（マルチモーダル・テキストの学習材化と授業実践の検討）、第4章（長編小説の学習指導方略の検討）、結章（研究の総括と展望）から構成されている。</p> <p>序章には、文学の読みの学習指導における「精読」と「多読」との関係を検討する必要性と、イギリスの「ワイドー・リーディング(Wider Reading)」を研究の拠点とする意義が述べられ、論文全体の研究課題が三点にわたって記述され、論述の手続きが示されている。</p> <p>第1章では、1980年代から1990年代にかけてのイギリス・中等国語科メディアセンター（the English and Media Centre）の副読本編纂状況およびイギリス教育政策の動向を検討したのち、副読本 <i>After the Bomb: Brother in the Land and Wider Reading</i>（核戦争を扱った小説作品の読み）の詳細な分析・検討がなされている。副読本全体の構造と展開を論じた後、具体的に長編小説『弟を地に埋めて』を扱った「ワイドー・リーディング」の単元事例の考察がなされ、イギリスにおけるワイドー・リーディングの学習指導観が明らかにされている。それによって本論文において文学の学習指導を考察するための基本的な枠組みが提示されている。</p> <p>第2章から第4章では、その基本的な枠組みを背景として、筆者自身が勤務した高等学校での授業実践を対象とした考察が展開されている。</p> <p>第2章では、生徒の「読むことへの関与」を促すために、国語教科書以外の文学作品（芥川龍之介「鼻」、村上春樹「沈黙」）を教材とした授業実践の検討がなされている。「ひとり読み」に困難を感じる学習者の実像を踏まえて、学習者が作品について書いた文章をくわしく分析しながら、学習者の「関与」を促し、解釈を生み出すために展開された学習指導</p>			

の条件が考察されている。

第3章では、第1章で扱った副読本の第4単元「小説冒頭部の映像化」を手がかりに、映像作品と原作小説との比較読みを起点とした文学の学習指導の検討がなされている。マルチモーダル・テキストを扱った単元「CM分析」において、「ワイダー・リーディング」を進めるために開発された理解方略学習サイクルが考察され、そのサイクルにもとづいて、小説「こころ」（夏目漱石）とそれと関連する併読テキスト（評論・翻訳・映画）との比較読みを行い、学習者の反応が分析され、映像作品の読みをどのように展開すれば文学作品の精読の力になるかということについての知見を得ている。

第4章では、高等学校2年生「現代文」で筆者が1年間展開した「読書会型」授業展開を持つワイダー・リーディング実践の分析・検討がなされている。「夏目漱石『三四郎』を読む」、「芥川『地獄変』を読む」、そして「カズオ・イシグロを読む」という三つの単元の実践に関する分析がなされた。単元「カズオ・イシグロを読む」では、イシグロの『忘れられた巨人』に関する生徒の読書過程の分析も行われている。最終章を丁寧に読み特異点を見極めること、「見る」という行為を手がかりにして主人公の造型を見極めること、結末部の類語反復に目を向けて部分から全体を読み直すこと等の、「読書会型」授業展開での長編小説学習において「精読」を誘うためのいくつかの知見が得られた。

結章では、第1節で本論文の総括を行い、第2節で今後の研究の課題を述べている。

本論文は、イギリスの **Wider Reading** に学んだ文学の学習指導方法論を、著者自身の高等学校国語科教育実践のなかで確かめながら精錬し、その過程を反省的に分析・記述しながら、読むことへの生徒の関与と読書体験を他者に伝える力を育てる文学学習指導論として提案したものであるが、以下の課題が残された。

- ・ 論述の根拠が必ずしも明瞭に示されないこと、
- ・ 教育実践開発に関する論述の濃密さを高く評価できる反面、それを分析・検討する枠組みを明瞭に設定し示されていないこと、

しかしながら、本論文には下記のような意義と特色を認めることができ、これらの諸点については博士論文として評価することができる。

(1) イギリスの **Wider Reading** の理論と方法を、実際に彼の地で編纂された副読本の克明な分析・考察を手がかりとして、それがイギリスの教育課程とどのように関連するのかということを吟味・検討しながら、「ワイダー・リーディング」という「読むこと」の有力な方法論として定位しえたこと、

(2) 「ワイダー・リーディング」という方法による文学の学習指導に取り組むことで、従来の「読解・読書指導」論あるいは「文学教育論」を超え、また近年のワークショップ型授業論の課題も克服する、文学の学習指導のあり方を提起することができたこと、

(3) 映像と文章との関連性を、文学の学習指導のなかに取り込み、視覚的な文学教育の方法論を見出しえたこと、

(4) 多様なメディアを読み解く方法を、国語科の「読むこと」の学び方として位置づけ、従来の「文学作品分析法」中心の「読むこと」の学習指導の枠組みを広げたこと、

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年2月14日